
チート君慎ましく

風間ハヤテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート君慎ましく

【Nコード】

N9573L

【作者名】

風間八ヤテ

【あらすじ】

禁忌の秘術の影響で現代から呼ばれ、チート能力を手にした青年。しかし逃げの精神全開な主人公君はひっそりと暮らしたい……。のだが、周りの少女達が引き摺って旅へと、冒険へと出てしまう事に……。ネタに走る男、流される主人公君が織り成す最強物語。

第1話「チート君の職業」

世界には禁忌と呼ばれた秘術が幾つも存在する。

それを行えば全てのバランスが崩れるというほど危険なために禁じられた技法。

書き残す事さえ罪になるといわれるほどに世界各地の厳しい定めによって何時しか歴史の渦に消えていったはずだった

しかし、現実とは違っていた

とある国の山々に囲まれた町の一つに、その秘術を行った男がいた。その男は先の大戦にて敗れた魔術師の一人、そしてその事が男を狂わしたのだった。

禁術の名は「大召喚」幾つもの対価と引き換えにそれに見合った力を持つ存在、又は見合うだけの量が召喚されるのだ。

対価にはその町に住む人々の命、及びある一定以上の魔力量を使用した。

人一人生贄に捧げればかなりの力を引き起こす。純正であればあるほど効果が高い。

そして、魔力には大戦時に男の下に転がってきた軍が遺跡などから発掘した魔道具や十数年かけて集めた魔法媒体を使用。世間に疎い山奥の町人達にはそれが何なのか分からなかった

そしてある日、その悪魔の技法が発動してしまった。

「あははははははっ」

狂ったように笑いながら術を完成させた魔術師。町を覆い尽くして

余りあるほどの魔方阵がその中にいる全ての存在を食らい尽くす。

人のみを対象にしたはずの術は暴走し、魔方阵の範囲にいる者ならば、魔物でも動物でも植物でも、生きてさえいればその全てを欠片も残さず食ったのだ

もし、その事を魔術を知る者が見ていたのならどれほどの恐怖を与えていたのだろうか、というほどに予想以上の力を対価に捧げていた。

制御できない、それが大召喚の禁忌とされた理由だったのだ。発動した魔術師も例外ではない

全てを食らい太陽の如く光り輝いた魔方阵は少しずつ凝縮していく、一つの形を成す様に。

そして、全ての光が収まった時、そこには青年が佇んでいた。誰もいなくなった町を眺め、そして何処かへと消えていった

消えた町より程近い場所にある小さな町、そこはいま1ヶ月前の謎の光が話題になっていた。

都からは遠い地にあるが、そこに目掛けて調査団が国から発足したほどだ

その町にあるお食事処の一つも例外ではない。

「あれから山の魔物がほとんどいなくなっただらしいぜ」
「動物もいなくなっただらしいぜ」
「動物もいなくなっただらしいぜ」
「動物もいなくなっただらしいぜ」
近場で起きた謎の異変にそこにいる皆が注目していた

「おい、こっちに酒を追加してくれ！」

「はい只今」

そして、その事件の中心にいるかもしれない青年は今、酒を運んでいた。

そう、彼はここでアルバイトをしていたのだ

彼の名は瀬田真治。気が付いたら現代からこの世界へと召喚されてしまった青年だ。

「客の案内頼むぞ、新入り」

「わかりました」

テキパキと働く彼、2週間前ぐらいにこのバイトを始めていた。

「おい、ちゃんと私のために働いてるじゃない」

「リリウム……また来たのか」

「いいじゃない、どうせ貢ぐ対象いないのでしょ」

「はっはっは、リリウムの嬢ちゃんは相変わらずだな」

活発な少女リリウム、彼女は森で倒れていたシンジを助けた人だ。そのため何だかんだ言いつつ頭が上がらないシンジだった

「そうそう、あなたの為に依頼受けてきたわよ」

「……………は？」

「は？ じゃないわよ依頼よ依頼。私がハンターだって教えたでしょ」

この世界にはやって欲しい仕事を報奨金を与えるという形で協会に提出し、それを受け取り遂行する人たちがいる。それがハンターだ。そのほとんどは傭兵に近い事をするが、たまに食材集めや町の人たちの困り事相談のようなこともしている

お金を沢山だしてまでやって欲しい仕事ならハンターに任せるとい
うのが通常だ。その分危険な仕事が多くなるのだ
そしてこの男、シンジは危険な事をしたくなかったのであった

「危険なのはお断りだつて何度言つたら分かるんだ」

「あら、こんな美少女一人赴かせようと言つたの、あんたは」

誰が美少女だという風に辺りを見回す、すると殴られた

「それにこれは薬草集めよ、あんま危険な場所ではないわ」

「……それでも外には行きたくない」

「あんたの意見は通らないのよ、おじさん、今日これ借りていくわ
ね」

「ああ」

「ちょよ、まっ」

殴られて痛む腹を無視されてズルズルと引っ張られていくシンジ、
ここ2週間で結構な頻度見られる光景だ

町の外にある森へとやって来ました。この世界には魔物がいると聞
かされてから、森を彷徨っていた時の事が恐怖になってしまった俺
です。

ビクビクしながら森を突き進む。帰りたけれどそうは問屋が卸さない

「この森の中には雑魚しかいないわよ」

俺の反応を楽しみながら進んでいくリリウム、アレだな理不尽って
やつだな、キヨン君がどんな気持ちだったか今なら分かる、はっき
りと

そして突き進む事数十分、目的の薬草が生えている地点にまで到達した。……俺、草の形なんてわからないぞ。

どうして良いかわからない俺の背中を”バンツ”と叩いたりリリウム、そして

「あそこ辺りの草を根こそぎ持って行けばいいのよ」と豪快な事をおっしゃりやがった

(これの所為で絶滅してもその責任はリリウムにある)と自分に言い聞かせて作業していた俺だった

ある程度の量が集まり、中には毒々しい色の物まであったのだが気に入らないで切り上げる事になった。

幸運にも森を出るまで魔物には出会わなかった

「つまんない」

隣では荷物を持たない少女が呟いている。

結構な事ではないか、魔物といえども命のやり取りなどしたくない、それにチヨー怖い

そう思いつつ森を出て数歩ほど歩いた所で後ろから物音が鳴った

「っ！ 来たんじゃない！」

嬉しそうに俺の腕を掴むリリウム、全力で前進しようとした事がばれていた様だ。

飛び出してきたのはスライムといわれる粘体生物。打撃にはめっばう強いが魔法、特に炎と氷系が苦手とされている魔物だ

「なんだ、やっぱり雑魚じゃない」

魔法も得意とするリリウムはこの程度の相手ならば複数出ても一人
で対処できる。俺もこの世界に来てから色々な魔法ができる様にな
っていた。何故かは知らないけれど……

「ねえ、あんたも魔法が使えるのでしょうか？　ならアレに対して使
つて見せて」

「えー、やだー」

その俺の答えにメキメキツと答える俺の腕、彼女の細い腕のどこに
そんな力があるのだろうか

「もう一度いうわよ、や・り・な・さ・い」

「……はい」

何故か命令形へと進化していた。

ゲームとかの「命令させるっ」はリアルにやると理不尽の極みだな、
そう思いつつ持ち物を地面へと下ろす

ウニヨウニヨしたスライムが近づいてくる。動かないで粘体生物、
どうしてその体で動ける、人を食べるんだ、絶対間違っている。

この異世界の法則に愚痴りながら両の手にそれぞれの魔法を集中する

ゴーストタウンと化していた町とその周囲で過ごした1週間ちよっ
との間に魔法というものを色々と知った俺、しかも使えるという特
典付きだった。

それ自体は嬉しい事だ。オタクな俺にはご褒美だった。……その所
為で今の状況があることは頂けないが

「右手からメラゾーマ、左手からベキラゴン、合体魔法メゾラゴン」
そう呟き粘体生物目掛けてどでかい火球を放つ俺、ネタに走った俺
は手加減などしない、ってかやり方を知らない

轟音が辺りに響く、あれほどの威力の炎をくらったんだ、雑魚と称されているあやつは生きておるまい、よしこれで帰れる。そう思いリリウムを見てみる、と何故か固まっていた

”ぶにぶに”

ほっぺを押ししてみても変化が無い、ただの屍の様だ。いや立っているから起きてる屍なのか？

まあいいと気にせず荷物を持つと下を向く……がそこには荷物が無かった。

辺りをキョロキョロ見回すがどこにも無い

(まさか誰かが盗んでいった)

この距離を気付かれずに盗むとは、ルパンかキッドだな、薬草なんてものを盗む訳はわからないが。

この世界は面白いのかもしれない、そう納得した時肩を思いっきり捕まれた

「……あなた、今、何をしたの」
低い声で言うリリウムに押される

「えっ、魔法だけど」

その答え方の選択はどうやら間違いだったらしい。胸倉を掴みなおして思いっきり揺すって来た

「あんな馬鹿げた威力の魔法なんて中位にもほとんどないわよっ！」

「何でそんな力を詠唱も媒体も無しに放てるのよ！」

世界が揺らぐ、目が回るほどに……

そして、質問もとい尋問が続いた。不幸だ。

今なら分かる、上条さんのあのセリフは合っていると

色々喋ってしまった俺、その俺に対して

「異世界から来た？ ま召喚はあるけれど、あんた、変態っぽいよ」
その言葉に遂に堪忍袋の緒が切れる

「お前な、そこに直れ！ 気付いたらゴーストタウンでひもじい思いをした俺の事を教えてやる！」

と演説を始めてしまった。その内容は俺がどれだけ怖い思いをしたかというモノだった

や、だって仕方ないじゃない、人っ子一人いない町はメチャクチャ怖いのだ。夜の真つ暗闇も相当なものだった。

それがどれほど辛い事を言わないと気がすまない

その魂の叫びに遂にリリウムが謝りを入れた

「…………悪かったわ、あんたがそれほどヘタレだったとは思わなくて…………謝りだよね今の、何か謝られた気がしないんだけど

「よしつ、分かったわ、私が貴方をヘタレから卒業させてあげる！」
何を聞いていたのだろうかこの少女は、変な決意をしているのがチヨ―気になる。

俺は平穩に暮らしたいのです。とその後伝えたのだが

「…………この現状をみて、それを言えるあんたは大物かもね」
と、森を指差していた。それにつられて俺も森を見る、と

「焼け野原？」

となっていたのだ、今まで森だった所が一瞬で変化するとは、この世界チヨ一怖い

「あんたがやったんでしょうが！」
俺の心の声に突っ込みを入れるリリウム。心の声がなぜ分かったんだ？

そして俺がこのままいるとどうなるのかを教えてくれるリリウム。国の調査団が到着するあさってまで居ると目出度く解剖コースへ行くらしい。

それはかなりご遠慮願いたいモノです。どうしよう、どうしたら平穏な隠居生活が出来るのだろうか……

異世界の父様、母様、妹様、世界は思っていた以上に厳しいようです。挫けてしまいそうになります

第2話「夜逃げやチート君」

世界はいつだってこんな筈じゃない事ばかりだよ。

少女達のデュエルを邪魔した某少年の言葉が頭に溢れてくる

薬草はいつの間にか俺のポケットに入っていた量でよかつたらしい。や、結構な量入れてやがりましたよあの少女は

町に帰ってミツシヨン失敗だと思っていた俺の顔を見て笑っていらつしゃいました。ちくしょー

そして泊まっている部屋に帰り荷物を纏める、そんなに量が無いのであつさりできた。

あとは店のおやつさんに事情を話して……どういえばいいだろうか？

「えーっと森を消滅させちゃいまして、てへっ」

……だめだな、それだとお尋ね者になってしまいそうだ、俺につく賞金額はチヨッパ―初期クラスの金額だろうか

「お友達のいないリリウムが忍びなくてついていく事になりました」
それだな！ うんそれならあのおやつさんも理解してくれるだろう

「だ・れ・が、お友達がいなくてすって」

いつの間にかドアの所に立っていたリリウム、すごく怒っていらつしゃった。

すかさず頭を下げる俺。この年下の少女に対しては見栄などない。欠片もないのだ。

「はあ、じゃあ色々調達してからいくわよ」

あれっ、こんな昼間から出発するの？ それじゃ夜逃げにはならな

いじゃないか？

「なんで夜逃げする必要があるのよ、普通に出立すればいいじゃない」

呆れながら言ってくる少女、俺だけだったようだ罪を犯したという気持ちは。

実行犯は俺。しかし主犯はリリウムになるはずだ絶対。

ゲームのキャラも街中で仕方なく爆弾とかを使っているのだろう。プレイヤーの命令なら仕方ない、うん

そう思いつつ、町を探索する俺たち。どれを買えばいいのかは分からないためリリウムに任せる。

「荷物持ちがいると楽よね」
と絶対旅に出る量以上に買い込んでいく少女。なんでそんなにお金を持っているんだ？

「あら、私は結構ランクの高いハンター様よ」
どうだ敬いなさいという感じに自慢してくるリリウム。胸を張るがその胸は慎ましかだ

「ほつつ、あんた死にたいようね」
”ビキビキツ”と音が聞こえてきそうなほどに青筋をたてるリリウム。それをリアルで初めて見た。

戦闘以外のダメージのほうが大きい俺、ま、あの一回しか戦った事はないが

「これで全部ね、あとはあの店に報告しましょう」

さて、この町での最大のミッションが訪れる、ホントなんて報告しようか？

「そうか、お前は仕事が出来た奴だったんだがな…物覚えが良いから嬢ちゃんの雑用には持って来いだな」

アレ、俺雑用する予定なんだ。あのお嬢さまの……

「短い間でしたけれどお世話になりました」

「おう、今度は客として来いよ」

さっぱりと辞める事を許してくれたおやっさん、バイト2週間終了は初めての体験だ。この世界では良くあるのかもしれないが

「ああそうだ、客の一人が変な事を言っていたんだが、どうやら南の森が消え去ったらしいぞ」

お前も気をつけるよと続けるおやっさん、その言葉に心臓が飛び出そうになった

「あ、は、はは、了解しました教官」

「??？」

とバグった機械兵士のような言動で思わず返してしまった。意味は伝わらなかつたみたいだったが

店を出て町の入り口まで来る、そこにはリリウムが仁王立ちしていました

「おそいつ！」

……世界はいつだってry

そして旅立ちの時、ロマンを胸に未知を求める壮大な物語の1ページ

ジがここから始まる

「あ、そつちじゃないわよ」

町から北に向かい出発した俺達、南には消し飛ばした森があり、西はゴーストタウンのあった場所で、東から調査団が来るとの事。君子危つきに近寄らずだ、港町も北にあるらしい

ここから港町まで5日ぐらいの距離があるらしい、歩いて5日って車だとのくらしいの時間になるんだろつ。

そして夜が来て野宿する事に、このお嬢さんは寢床を用意すると

「見張り、頼んだから」

さっさと寝ようとしていたのだ。

自分の今の立場が分かっていたらっしやらないようだ、男は皆狼なのですよ

「あんたにそんな度胸は無い」

だから何故俺の考えている事が分かるんだ

「読みやすいのよ、考えている事が」

なん……だと、ポーカーフェイスシンちゃんと呼ばれた俺が当てられた……だと

「じゃあオヤスミ」

それには突っ込みをいれずさっさと寝てしまったりリウム。虚しさだけが我が前をよぎる

そうこうして数日がたった。俺も夜はグッスリと寝ています。この世界に来てのゴーストタウンでのサバイバル途中で知った魔法という技術のお陰だ。

最初に覚えたのは野犬に襲われるかもしれないという恐怖から、「寝てても安心、安全領域」と名付けた結界魔法だった

しかし、この世界には魔物という野犬より強い生物が存在する。改良をしなければなるまい。

とまあそんな感じな事を考えつつ、運び屋こと荷物持ちな俺は恐怖の森へとまたまた突貫する。

「迂回しよう」と案を出す前に

「突っ切るわよ！」

と嬉しそうな顔で引っ張っていく少女。俺の意見は喋る事すら適わない

昼間の森、辺りには聞いた事の無い様な鳴き声が響いている。めちゃ怖い。

バトルマニアっぽいリリウム、頼むから俺を巻き込まないで欲しい森深くまで侵入した俺達の視線の先に、動いている木々が少女を襲っているのが見えた。

逃げる

逃がす

逃げよう

転進する

……楽しんでるようだし邪魔しちゃ悪いよね。ということとで違う道へ行こう

「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ」

とする俺に対して魔力を込めた一撃を俺の背に放つお嬢さん。

「ちょ、おまつ、何て事をしやがる」

高速で木々へと吹っ飛んでいく俺。逃走を仲間に拒まれるとは

「ってそんな事考えている場合じゃない！」

木々の一つまであと少しという所までいつの間にか来ていた

「安全領域、展開」

自分の周りだけを護る様にした結界を纏い防御を試みる

”ズドン”

と当たった瞬間に吹っ飛んでいく木々たち。俺は防御しただけ、ということはこの威力はリリウムの一撃という事に。

あのぺたん娘、何て攻撃を俺にするんだ。馬鹿なの死ぬの、俺が。

もう誰も信用できない、という風に背中語っている俺。をまるつきし無視して少女へと駆け寄っていくリリウム。

「大丈夫？」

「は、はい、ありがとうございます」

この娘はどうやら礼儀正しい様だ、リリウムと違って。

さて、これからどうしようか、まだ結構な数いる木々を相手にする事は俺はしたくない、いや一匹でも相手したくない。

安全領域もどれほど持つか分からない、少女も助けたため、もう逃げるコマンドを誰にも邪魔されないはずだ

そう考えていた俺にリーダーは命令を与えてきた

「よし、じゃああんたアレを滅しなさい！」

これがゲームキャラの運命か、プレイヤーの命令は絶対遵守らしい、どこのペルージだお前は。

逆らえない何かがある俺の中を駆け巡る、もしかして本当にナニカサレテイタリ

木々が迫る、木と言ったらこれしかないなと少し上に角度を調整しつつ魔法を発動する

「デイベインバスター!!!」

砲撃の女神様お得意の一撃が森を貫通する。桜色の高魔力砲が木々を吹き飛ばし、空を割っていく。

……非殺傷設定じゃないとこれほどの力があるんだね、フェイトちゃん良く耐えたよホントに

その一撃で木々は粉々になり消滅した。そして理不尽な尋問タイムの再突入だ

「あんな魔法なんて存在しないわよ！」

「すごいです、純粋な魔力のみでこれほどの威力を持たせるなんて2人から迫られる俺、一見飴と鞭っぽく見えるが、実際は鞭と鞭だった、この少女の俺を揺さ振る力はリリウムと互角だ

俺への拷問もとい尋問が一段落して、お互いの名前を紹介する。

「私はアリス・フォンヒルデと申します」

「私はリリウム。でこっちの変態がシンジよ」

「変態ですか？」

「そ、変態よ、あんなふざけた威力の魔法を簡単に唱えているんだもの、これ以上無い変態だわ」

「あ、ははは、そうかもしれないですね」

気分が悪くなっている俺を余所に好き勝手言っているリリウム。それに賛同している少女アリス。この世界は俺に敵しいとです

「で、アリスはこれからどうすんの？」

「デイポールという港町まで行く予定です」

「あら私達と同じじゃない」

「本当ですか、なら一緒に行ってもいいですか？」

「ええ、いいわよ。ってあんた何してんの？」

無視して話を進められているため、地面のアリ達をじっくりと観察していた俺に何故か呆れ口調で言ってくるリリウム。

何しているかだって見れば分かるじゃないか、一度見出すとビミョーに止められないんだぞ、これ

「はいはい、じゃあアリスの分の荷物も頼むわ」

「へっ、私のは別に大丈夫ですよ」

「いいからいいから、こき使いなさいよ、これを」

頼むといいながら絶対持たせようとしているリリウム。これ扱いて酷くない。

「あの、ではお願いします」

と荷物を持たせる少女アリス、真っ白と思っていた心だったがこの少しの間にリリウム色に染められてしまったようだ。

リリウム、お前を少女の前には出せない。感染拡大してしまうぞ

そう呪詛を魂の中で唱える俺、そして荷物を持つ。やっぱりペル

ジ兄だなこいつは、逆らえない

そうして、新たな少女と共に港町へ向かうのだった

第3話「海を渡るチート君」

港町、ディポール……小さいながらも活気に溢れる町だ、至る所に船が並んでいるのが見える。

ようやく安全地帯に入った俺たち3人組。特にあの森から抜けるまでが大変だった。

親指大の昆虫ですら躊躇う俺なのに、人間の頭を軽く超えるサイズは見るに堪えないモノでした。それなのにSっ気たっぷりなお嬢さんに突撃命令される日々。おうちかえりたいです

絶対この世界は間違っている、あの小さなイナゴでも繁殖すればあれだけの被害を生み出すのに、あのサイズが大繁殖したら森など丸裸ではないか。

そこんとこどうなのよ、天敵がいらないといっぱい繁殖するんだぞ。

安全が確保された瞬間に今まで萎縮していた気持ちが膨らむ、世界に喧嘩を売るほどに。

「ちょっと、さっさとこっちへ来なさい」

Sお嬢さんがそんな俺を軽くいなして歩いていく。これが若さか……

まあ付いていく俺、知らない土地で逸れると寂しいのだ。

行き着いた先はでかかど「ギルド」と書いてある所だった。そこへ躊躇いもせず入っていく2人。これが噂に聞いたハンターズギルドか

”ゴクツ”と喉が鳴る。この中にはツワモノという名の強面さんた

ちが大勢居るのだろう。もしかしたらリリウムっぽいのが、いっぱい居るのかもしれない。

コンテナにも冷蔵庫の後ろにもリリウムがいっぱい!?

「変な想像しないで入ってきなさい!！」

荷物を俺の頭に正確に投げつけたリリウム。倒れた俺の襟を掴みズルズルと引き摺っていく。

「あ、はは、ちょっと恥ずかしいかも」

アリスちゃんがそう呟いているのが聞こえてきた。俺はそれ以上に恥ずかしいぞ。

ヤーさんな所に突入した俺、人がウヨウヨ居ると思っていたが中には待ち合い人が数名いるだけだった。

それにはイメージ以上に綺麗な所だった。

色眼鏡で見るのはいけないな、うん。

現実を理解した俺、これなら次からお手伝いにもこれそつだ。

「ようこそ、ギルドへ。 中々面白い入室ですね」

「ごめんなさい、この事は忘れて」

受付の女性と話すリリウム。襟をまだ掴まれているので立てない俺だった。

またこれ扱い、覚えとけよお嬢ちゃん。チート能力全開で顔に落書きしてやる……いつかは

立てない俺をこの場に居る全員が無視しながら話が進んでいく。

「海を渡れる依頼って入ってない?」

「でしたらAランクが2つにBランクが1つ入っています」

3つの資料をカウンターの上に広げる受付嬢。

「封印島ギシルへ行けるじゃない。これ」

「はい、こちらBランクは運搬の仕事ですね。依頼内容は卵を運ぶ仕事です」

「げっ、繊細なのは苦手なのよね、って今荷物持ちが居るから平気か」

その荷物持ちは多分俺なのだろう。まあリリウムが自分で重いものを持つわけが無いが

「あの、それって合同で出来ますか？」

控えめに聞いてきたアリスちゃん、合同って何だ？

「あれっ、アリスもハンターだったの？」

「はい、まだ若輩者ですけれどこれまでいきました」

「なら大丈夫そうね、海を渡るのは自然とランクが高くなっちゃうから、危険もランクほどには高くないからね」

「では、合同で登録します、よろしいですか？」

「ええ」

「はい」

カタカタツと音が上のほうで鳴っている、何をしているのかはわからなかった、全然見えないからだ。

しかし会話の内容は聞こえた、アリスちゃんもハンターらしい。うん、なら俺は後方で「応援」とかの支援スキルを発していればよさそうだ。よかった。

危険な事は2人に任せて俺は海を優雅に楽しんでいればいいんだな。ようやく異世界で一息つける時が来たようだ。

後は俺のことを思ってくれる心優しい女性が来てくれれば満足だ。

アリスちゃんはやさしいが、最近リリウム色が強くなってきている。

この一日二日で悪化汚染させるとは、リリウム恐ろしい娘！

「では登録完了しました」

「うし、じゃあ早速行くわよ」

「えーっと、そろそろ放してあげては」

「おお、すっかり忘れていたよ」

非道い……俺って何なのだろうか？

哲学する青年「俺」。それをまたまた放置していたリリウム。しどくなく、やっぱり

ギルドを出て町を移動する俺たち。目的地はプチ研究所っぽい所だった。

そこで卵をケースごと預かり、海向ここのギルドへ預ければ良いらしい。それぐらいなら自分達でいったほうが良いのではないのだろうか？

「最近、この少し先の海に大型の魔物が棲みついたらしくて、そのために迂回する海路で移動するようになったのです」

「ですから、行き帰りの通行料と危険性を考慮するとハンターに任せたほうが良いとの判断なのですよ」

その疑問にアリスちゃんが答えてくれた。いや大型の魔物って、俺もご遠慮願いたい

やっぱりケースは俺持ちだった。そして、そのまま船へと乗り込む俺たち。

結構大きな船だ。メリー号が小さく思えるほど。

それには沢山の客も乗っていた。豪華……ではないのでタイタニックにはならないだろう。そう願いたい

「はうっ」

「おっと」

甲板にて考えながら立ち止まっていると後ろ腰辺りに軽い衝撃が当たった。振り向くと少女、いや少女がそこにはいた

「うっごめんなさい」

「だいじょうぶ？」

頭を抑えながら謝ってくる幼女。リリウムには合わせられないな、この娘までリリウム菌が増殖したら世界が終わりへと向かってしまう

「すみません、ほら急に走るから」

その幼女の後ろから女性が走ってきた。まだあどけなさが残る顔立ちなのにスタイルは抜群の女性だ、背負った剣とツインな髪もおしゃれだ。この娘のお姉さんなのだろうか

「なぐに、見とれてんのよ！」

と後ろから和服を着れば似合いそうな体型のお嬢さんがいつの間にか立っていた。(アリス含む)

「いたいのいたい飛んでけ〜」

とアリスちゃんが幼女の頭に指を少し回しながらおまじないをかけていた。すると

「あっ、いたくなくなつた。おねえさんすごい！」

とはしゃぎ出した幼女、マジで効果があつたようだ。魔法の一種だな、たぶん

「どうやったの？ 今の魔法じゃないわよね」

「即効性の薬草を粉末状にしていたのをかけただけですよ」

「ありがとだね、けどそれって貴重じゃないの」

「いえいえ私は一杯持っていますから」

知らない間に仲良しになっていた3人。幼女もアリスに懐いたよう
で実質4人……か、そして俺は背景の人と化す

この船も順調に航海を続けている。封印島ギシルまで後2日という
距離まで来ていた

甲板でお喋りしている女の子たち、ここ数日でさらに仲良しになっ
ていた。その後ろで悟りが開けるんじゃないかというほどに、物静
かに瞑想を開始していた俺、たまに相手をしてくれていた。

そんな中、船のクルーたちが急に慌てだす。前方に巨大モンスター
が出現したらしい。

ちよつ、迂回ルートに来るなんて聞いてないよ

乗客を避難させるクルー。悲鳴をあげながら逃げ惑うお客さんたち。
嬉しそうに巨大なタコ型モンスターを眺めるリリウム。俺よりリリ
ウムの方が絶対変態だ。

船内とは反対側、つまりタコに近い所に歩いていく3人の少女たち。
頼りになるね、ということで俺は他の乗客に紛れて船内へと洒落込
みますか

「あんたも来なさい!」

と思いつきり殴ってくるリリウム。ちつ逃げようとした事がばれた
様だ。

「殴ったね、親父にも殴られた事ないのに!」

「私はいつも殴っているわよ」

「もつとも……いや少女にいつも殴られる青年って

「面白い関係ね」

「はあ、もう諦めました」

「おにいちゃん、だいじょうぶ?」

この幼女だけだよ俺を心配してくれているのは、これからはお名前のユエちゃんと呼ぶようにしよう

「この戦闘は海の上になりそうだけど大丈夫ですか」

ユエちゃんのお姉さん、じゃなくて護衛の人だったサクヤさんが尋ねてくる。ふつ愚問だな。

なぜならば戦わないからだ、戦闘しなければ海だろうが空だろうがどうということはない!

「今回はほっときましょう、海の上でアレを放たれたら船が転覆しちゃうかも知れない、という事を今思い出したわ」

俺の魔法の弱点、それは根付いたイメージ通りの威力が最低限レベルの威力となつていることだ。

つまり、ディバインバスターはフェイトちゃんに使った時などのアニメを見たイメージが手加減できる最低限の威力なのだ。込めていけばそれ以上の力と化す

逆に弱いイメージの魔法があれば調節は可能だった、しかしネタに走る男「シンジ」にはそのような方法での対処など考えた事など一度も無い! 無いったら無い!

「さて、足場を作りながら行きますか。アリスは平気?」

「はいっ、私はこれで行きますから」

と一粒の種を取り出したアリス。念を込めるとそれが大きな翼のよう
に背中に纏わりついた。

「これは浮葉科の植物の一つで、雲を軽く超える高さの細い山々の
頂上付近に主に生息している植物です。けっこう力持ちさんなん
ですよ」

「珍しいものを持っていますね」

「よし、じゃあ行きますか」

「がんばってね」

「行って来ます」

手を振りながら戦場へと赴く少女たち。あの顔なら楽勝っぽいな、
では俺は優雅に船を満喫しておこうかな。

おっいい所にチェアがある。思わず外国語で答えるほどに良い夕
イミングだ

海やプールにあるっぽい椅子を二つ持ってきてユエちゃんも座らせ
てあげる。角度は寝転びながら戦いが見えるように調節しておいた。
今このセリフを言わなければなるまい

「ん、とろびかる」

「おにいちゃん、なにそれ？」

ユエちゃんが不思議そうに聞いてくる

「これはね、考えるんじゃないかって感じ取るんだよ、ほら、これを持
ってユエちゃんもやってみて」

さり気なく用意してあった飲み物（ストロー付き）をユエちゃんに
渡す

「んーとろびかる」

「なんか楽しいね！」
すごいつ、この娘、何て才能に満ち溢れているんだ！ これは俺がどこまでこの娘を成長させられるかという神の啓示に違いない！！ 雷に打たれたほどの感動が体に満ちる。が今は「とろびかる中」を満喫する

椅子を用意している間に3人は海へと突っ込んでいった。
アリスは空から、リリウムは海を凍らして海氷を作って移動している、サクヤさんは海の上を飛び跳ねている。

3人ともスゲー、あの巨大タコに躊躇もせずに突っ込んでいけるなんて、僕にはとてもできない。

俺ならここからスターライトブレイカーを打ち込んだじゃうな、近づきたく無いし、でもそれだと波で船が大変な事になってしまうけど

「一番槍は私が貰うわ！」

巨大タコがその足を近づいているリリウムに対してなぎ払うように動かす、それを軽々と飛び越えそのままの姿勢から術を放つ

「アイス・ラン！」

右手から放たれた氷が直進する。高速な一撃は巨大タコの足の根を海ごと凍らした

「私も続きます、アイビスバインド！」

空中から両の手に草を持ったアリスがそれを放りながら魔法を唱える。

増殖した鳶が巨大タコの自由を奪っていく

「リーフショット！」

続け様に背中の中翼と化した植物から夥しい量の葉が放出される。大量にしかも一点のみを狙った葉の攻撃にタコの足が切断された。

「#¥\$%#&%\$」

その攻撃で排除目標を空の敵へと変更したタコは、聞き取り難い音と共にアリス目掛けて水弾を連射する。

それを回避し続けるアリス、だったのだが一つだけ当たってしまった

「きゃっ」

咄嗟に植物の羽を防御に回す。通常の水ならば植物の加護で威力は弱まるのだが、今回は塩気が多い海水の弾だ、植物が吸い取ると萎びてしまうためにその威力を弱める事が出来なかった。

「びっくりした〜」

とはいえ、その水弾一つで落ちるほど軟なアリスではなかった

「よそ見してたらだめだぞ〜」

アリスに攻撃していた隙にタコの懐に入っていたサクヤ、重力を集めた右手をタコに打ちつける。

辺りに音が響き渡り、凍っていた海諸共タコを吹き飛ばす。その威力によって発生した波が船を揺らしたほどだった

「ちよつと、危ないじゃない」

「あはは、ごめんね」

海氷を足場にしていたりリウムが、今の海の揺れの被害を一番受けていた。

その一撃で鳶の拘束が解かれたタコが暴れまわる、当てる事など考えていないような動きだ

「自棄になったら勝負はおしまいよ」

先ほどから溜めていた魔力に詠唱にて属性を与えていく。時間の掛かる大技が出来るほどに相手は隙だらけだった。

「フィンブル！」

破滅の冬が巨大タコの命を削っていく。周辺の海を更に凍らし、その氷の体積が乗ってきた船を軽く超えるまでに至っていた。

「さて、止めをさしますか」

「離しますよ」

「了解」

魔法の効果範囲外の上空ではアリスがサクヤを掴んでタコの真上まで飛んでいた。そしてそこから手を離し、重力に従って落ちていくサクヤ。

「でやあああああつ！」

背中の剣を抜き取り、重力をその剣へと込めていく。黒くそれでいて何か重みがありそうな見た目になった剣を構え

「重撃斬!!!」

言葉と共に鋭く攻撃を放つ。超上空からの重力を纏っての一撃は、必殺の領域を遥かに超えた威力となっていた。

冰山と化したタコを氷ごと切り裂いていく。いや、切り裂くというより砕いていったと言う方が適切ではあった

「終了ね」

「楽勝だったね」

「私一人では勝てないですよ」

砕かれ空を舞った氷がキラキラと太陽の光を反射している。

その幻想的な光景の中心、辺り一面氷にて白くなった海に降り立つ少女3人、これにて戦闘終了となったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9573/>

チート君慎ましく

2010年10月10日18時34分発行